

1. 史跡・名勝・天然記念物・民俗資料・埋蔵文化財などの調査研究と指定の促進
2. 保存と開発に関係する各省庁の連絡強化
3. 開発事業に伴う事前調査の強化
4. 重要地域・文化財の国有化
5. 文化財の環境保全
6. 文化財をもつ地方公共団体に対する財政的援助
7. 指定物件の所有者に対する免税、補償等の措置
8. 文化財台帳の整備ならびに地図の作成

6-15

庶発第267号 昭和39年5月13日

内閣総理大臣 池田勇人 殿

日本学術会議 会長 朝永振一郎

(写送付先：科学技術庁長官、大蔵・文部両大臣)

霊長類研究所(仮称)の設立について(勧告)

標記のことについて、本会議第41回総会の議に基づき、下記のとおり勧告します。

記

霊長類研究の重要性にかんがみ、その基礎的研究を行なう総合的な研究所を速かに設置されたい。

理 由

1. 霊長類研究の必要性

- a) 霊長類研究が人類の起原、系統の問題を解明するに当って重要な鍵になっていること。人類の起原、系統を解明することは、人類学の重要な課題の一つである。そのためには古人類の化石遺物そのものの研究のみに止まらず、古霊長類化石の研究、さらには現生霊長類との比較調査を怠るわけにはいかない。むしろ現生の人類と霊長類との正確にして詳細なる関連性を知って始めて、古人類と古霊長類の関係が解明され、人類の系統進化を知る道も開かれるというものである。

現生人類の形態学的・生理学的・生化学的な諸形質の変異の原初型を推定するのに、霊長類の形質の研究は欠くことのできないものであり、また人類の習性、集団形態や文化の起原の資料としても霊長類の心理学的・生態学的・社会学的研究が必要である。霊長類研究は広範なる人類学の各分野にわたって、その基盤をなすものである。

- b) 霊長類の基礎的研究はそれが実験動物として必要欠くべからざること。医学、薬学、生理学、航空医学などでは、人類に最も近い動物という意味において、人類のかわりをつとめる最適の実験動物として、霊長類が近年特に注目されだし、大量に使用されるようになってきた。これはたとえば、小児麻痺ワクチンの生産は、そのウィールスがサルでなければ感染しないという必然的な理由により、またガン、心臓脈管系疾患、老化現象、薬品の効力テスト、その他の研究においては、少しでも人に近いものが実験に有利であるという当然な理由によるものである。そしてその需要に伴って捕獲、輸送、飼育管理、疾病などの研究とともにサル自体の基礎的研究が要望されるようになったのである。サル自体の正確な知識をもつて実験研究に供した結果と然らざるも

の結果とでは、その価値において比較にならぬ差異があるからである。

2. 外国に於ける霊長類研究の現状

従来、霊長類の研究は国の内外を問わず、動物学、人類学、生態学、心理学、医学等の片隅で細々と行なわれてきたに過ぎなかつた。

外国において霊長類の研究を主目的とした研究所には、心理学を主体としたアメリカのヤーキス霊長類研究所、ソ連のスフミにある神経生理学を主要課題とした研究所、中国の昆明にある中国科学院の研究施設など五指に満たず、しかもそれらは特殊部門に偏した研究所であつた。またカーペントナーの数種の野生サルの野外研究が注目されたのであつたが、いずれも1940年以後の活動はあまり活潑ではなかつた。ところがこの1~2年のうちに特にアメリカにおいて、新しい視野に立つた霊長類研究所が、合衆国政府の全面的な援助のもとにつぎつぎに設立されるに至つた。主なものは次のようなものがある。

1. Oregon Regional Primate Research Center.
2. Regional Primate Center, University of Washington.
3. Wisconsin Regional Primate Research Center.
4. Yarkes Regional Primate Research Center.
5. Delta Regional Primate Research Center.
Tulane University.
6. New England Regional Primate Research Center.
7. California Regional Research Center.

ヤーキス研究所は従来の姿から脱皮し、次の9部門を含む総合研究所に改められて再出発する。

- | | | |
|-------------|--------------------|----------|
| 1. 解剖学及び人類学 | 2. 心理学(生態学、社会学を含む) | 3. 微生物学 |
| 4. 生化学 | 5. 薬学 | 6. 組織化学 |
| 7. 電子顕微鏡 | 8. 病理学 | 9. 神経生理学 |

さらに1959年にはニューヨーク動物学協会が、2カ年継続のマウンテンゴリラ調査隊をアフリカに派遣して、400頁に余る報文を刊行し、多大の成果を収めた。近年特にアメリカの霊長類研究に対する熱の入れ方には、並々ならぬものがある。

3. 日本に於ける霊長類研究の現状

わが国における戦後の霊長類研究を顧みると、その研究はまず昭和27年度文部省科学研究費により、東大伝染病研究所を中心とした実験動物研究会と京都大学を中心とした霊長類研究グループによつて始められた。この研究費は5ヶ年継続した後に打切られたが、昭和32年には名古屋鉄道の援助により、新たに財団法人日本モンキーセンターが霊長類の社会学的生態学的研究、実験動物としてのサルの研究および供給、博物館活動の三つを目的として設立された。日本モンキーセンターの研究はその後熱心に継続され、野生サルを餌づけし、個体識別を行い、サル社会の仕組みの発見を基盤にして、長期にわたる群れの歴史的な分析を行つてゆくというユニークな方法と、ゴリラ、チンパンジーを始め、アフリカ、インド、マライ、ブラジル等における多種類のサルについての比較研究は、霊長類の基礎的研究特に社会学的分野に大きな貢献をしてきたのである。そもそもわが国の霊長類研究者(人類学、動物学、心理学、医学、獣医学分野の)は大学、研究所に分散孤立し

ていたが、日本モンキーセンターはこれらの人々に研究上の共通の場を与え、その結果数多くの共同研究が成されてきた。現在日本の霊長類研究は外国に劣るものではなく、国内にサルが生息するという事情も幸して、ある面ではより活潑な特徴のある活動をしているといつていい。

4. 研究所設立の要望

霊長類研究のごとき動物学、人類学、医学等の境界領域にあるものは、とかくその存在をなおざりにされ勝ちであるにもかかわらず、わが国の霊長類研究は特異な民間組織のもとで発達し、困難な環境下にありながらすでに輝しい先駆的業績を挙げてきた。

しかしこのままの状態では放置するならば、もはやこれ以上の発展は望みがたく、外国に対しておくれをとるのみか、せつかくここまで萌えてた芽を抑えるような結果にもなり兼ねないことが憂慮される。ここにおいて、一段と広い視野に立つとともに、国費によつてまかなわれる総合的研究所の設置が、切に望まれる所以である。幸い、日本モンキーセンターはその経営する世界サル類動物園並びに博物館の資料一切を、霊長類研究所設置の暁には、優先的に研究対象として使用に供する用意があることを申出ている。世界をあげて霊長類研究に力を注いでいる今日、日本においても高度な成果をあげるべく至急に研究施設を強化充実されることを望むものである。

5. 組織(案)

a. 共同利用の場として設置されるものとし、取敢えず適当な大学に附置する。(国立学校設置法第4条第2項の適用をうけるものとする。)また、運営上関連諸科学の研究施設とは密接な連絡を保つようにする。

b. 所長、教授、助教授、助手、技官、司書、事務官等の職員をおく。

c. 本研究所に9研究部門をおく。

- | | |
|----------------|----------------|
| (1) 霊長類系統研究第1部 | (2) 霊長類系統研究第2部 |
| (3) 霊長類行動研究第1部 | (4) 霊長類行動研究第2部 |
| (5) 霊長類生活史研究部 | (6) 霊長類社会研究部 |
| (7) 霊長類応用研究部 | (8) 第1客員研究部 |
| (9) 第2客員研究部 | |

各研究部の主要な研究内容は次のとおりである。

系統研究第1部は現存および化石霊長類の比較研究により霊長類の分類ならびに系統を検索する。

系統研究第2部は系統研究第1部の研究と呼応しつつ、専ら変異ならびに遺伝を通して霊長類の分類および系統を追求する。

行動研究第1部は心理学の立場から霊長類の行動の進化を解明する。

行動研究第2部は行動研究第1部の研究と呼応しつつ、神経生理学の立場から霊長類の行動の進化を検討する。

生活史研究部は個体の年齢、性による形態、機能および行動上の変化、自然群の年齢、性構成、ポピュレーションに関する諸問題その他を研究する。

社会研究部は霊長類の社会構造を自然群ならびに実験群を用いて生態学的、社会的に研究する。この目的のためには観光用でない自然群ならびに実験群を保持することが必要である。

応用研究部は実験動物としての霊長類に対する基礎研究を行うとともに、併せて疾病、育種等をも研究対象とする。

客員研究部は、国内および国外の客員研究者の共同利用や共同研究者の使用に供する。第1部はおもに形態学・生態学に基礎をおき、第2部は主として生理学・生化学などの方法による特殊研究課題にあてるが、その利用度はきわめて高いことが予想される。

d. 本研究所は国際的にも役立つような霊長類研究の情報センターとしての機能を併せもつ。

e. 本研究所には次の附属施設をおく。

(1) 実験用サル飼育施設

(2) 野外観察施設

6. 設備施設費

| | |
|------|--------------|
| 概算総額 | 365,000,000円 |
| | (土地費用は含まず) |

内 訳

| | |
|-----|--------------|
| 設備費 | 195,000,000円 |
|-----|--------------|

| | |
|-------|--------------|
| 研究施設費 | 140,000,000円 |
|-------|--------------|

| | |
|-------|-------------|
| 附属施設費 | 30,000,000円 |
|-------|-------------|

7. 研究所要員

| | |
|-------|-----|
| 教 育 職 | 44名 |
|-------|-----|

| | |
|-------|-----|
| 行 政 職 | 45名 |
|-------|-----|

| | |
|-------|-----|
| 総 人 員 | 89名 |
|-------|-----|

(行政職には技官を含む)

8. 年間経常費

| | |
|------|-------------|
| 概算総額 | 86,500,000円 |
|------|-------------|

内 訳

| | |
|-----|-------------|
| 人件費 | 43,000,000円 |
|-----|-------------|

| | |
|-----|-------------|
| 研究費 | 25,000,000円 |
|-----|-------------|

| | |
|--------------------|-------------|
| 共同利用のための 員外研究員費 | 16,000,000円 |
|--------------------|-------------|

| | |
|-----------------|----------|
| 共同利用のための 運営費 | 500,000円 |
|-----------------|----------|

| | |
|-------------------|----------|
| 情報センターのための 運営費 | 500,000円 |
|-------------------|----------|

| | |
|---------|------------|
| 研究報告出版費 | 1,500,000円 |
|---------|------------|